



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

ミサの時間：月曜日-土曜日 6:20am（「朝の祈り」に続いて）
日曜日 7:00am、8:30am、9:30am



洗礼式

主任司祭 小西 広志 神父

今年の復活祭で多くの方々が洗礼を受けられます。新型コロナウイルス感染症蔓延のおかげで教会の活動が制限されてきたにも関わらず、主日のミサには多くの方が集ってくださり、そして、こうして新しい兄弟姉妹を瀬田教会に招き入れることができたのを感謝いたします。

洗礼式で、ふと、思い出したのですが、子どもの頃の洗礼式というのは、ミサの道具や祭服がしまっている香部屋で行われた記憶があります。田舎の小さな教会でしたから、洗礼盤などあるはずもなく、幼児洗礼であれ、成人洗礼であれ聖堂脇の香部屋でしていました。それから、覚えているのは、洗礼式が聖堂の入口に一番近い位置で行われたことです。つまり、聖堂に入っただけの、入口に近い場所で洗礼式をして、それから司祭と受洗者と代父母は祭壇へと近づいていきました。

ミサの中で、しかも復活徹夜祭の中で洗礼式をするようになったのは一九七〇年代の中頃を過ぎてからだったように覚えています。今でも、例えば幼児の洗礼などはミサと切り離して行う国と地域はあるかもしれませんが。しかし、日本の場合、よほどの理由がない限り洗礼式をミサと切り離して行うことはないでしょう。

キリストの過越秘義に与る、組み入れられていくという秘義神学の萌芽は、今から百五十年ぐらい前からでしょうか。紆余曲折を経ながら、秘義神学は典礼神学のメインストリームとなっていったのでしょうか。このあたりのことは典礼神学の歴史に関する日本語の本が少なく、検証できないのは残念です。日本のカトリック教会は、この五十年間、秘義神学の典礼上での実践に取り組んできました。洗礼式をミサと切り離さないという、今では当たり前になる典礼の実践も、五十年前には奇異に思えたでしょうし、考えもつかなかったと思います。もちろんこの間、逸脱もあったでしょう。後退も生じたでしょう。しかし現在、ほとんど多くの司祭たちが洗礼式をミサの中でしようとしているのは、良いことだと思います。もちろん、緊急でないにも関わらず、洗礼式を単独で行う司祭もまだいるでしょうけれど。むしろ、そっちの方が、信徒から見たら奇異に思えるでしょう。

ミサの中で行う洗礼式は良いものです。しかし、通過儀礼といましようか、initiation（加入儀礼）の側面ばかりが強調されてしまうと、洗礼式とは共同体への加入の儀式という理解だけが先行してしまうように思えます。逆に、かつてのようにコソコソと隠れるかのように行われる洗礼式では、神の子となり、それまでの罪がゆるされるというめぐみの側面ばかりが強調されすぎてしまうでしょう。それでは、教会共同体との関わりが薄らいでしまいます。このあたりのバランスを取るのが難しいかなと思います。

かつて、イタリアで学んでいたとき、あるクラスで教授が「洗礼のめぐみは何ですか」と訊いてきました。スペイン人の学生が「罪のゆるし」と答えると、教授は憤慨して「そうじゃないだろう。最大のめぐみは神の子となり、神のいのちに参与することだ」と大きな声をあげました。ひるまない件のスペイン人は「e pure」（エ・プーレ）と答えました。e pure とは「それもまた」という意味です。教授はさらに憤慨して「e pure じゃない。最も大切なことだ」と叫びました。そのやりとりを目の当たりにして、「あれ、信仰共同体に結ばれるというめぐみはどこにいったんだ？」と思ったのを覚えています。クラスが終わってから、仲良しだったエジプト人の学生に「洗礼のめぐみには信仰共同体に結ばれる、もあるよね」と話しかけると、彼曰く「あいつらわかねんだよ。おれも、おまえも、いのちをかけてキリスト教の門をたたいたことを。キリスト教徒になるとは、社会の中から孤立するという哀しみを秘めていることがわかんねんだよ。」と吐き捨てるように言ったのが印象的でした。

皆で一緒に洗礼式をお祝いして、共同体への歓迎の意味をこめて拍手で洗礼を受けた兄弟姉妹を受け入れるのは美しい光景だと思います。「典礼の最中に拍手はふさわしくありません」などという杓子定規なとらえ方は、信仰の共同体の中にあるダイナミックな力を削いでしまうものです。喜びながら教会共同体の新しいメンバーを受け入れましょう。

そして、洗礼を受けられた方々が瀬田教会を通じて日々の生活を生き生きと過ごされますように。お祈りしています。